

江戸の坂道散策

第5回 我善坊谷坂（港区）



山野 勝 Yamano Masaru 坂道研究家

1943年、広島県生まれ。早稲田大学政経学部新聞学科卒業。報知新聞社を経て講談社に入社。「ヤングマガジン」編集長、第3編集局長、取締役、常務取締役を務め、現在講談社顧問。この数十年、東京の坂道を積極的に歩き、エッセイや講演などで坂道ブームの火付け役。『タモリのTOKYO坂道美学入門』（講談社）に企画参加。著書に『江戸の坂 東京・歴史散歩ガイド』（朝日新聞社）がある。

港 区麻布台一丁目一と二の間に「我善坊谷坂」という、実に美しい姿をした古坂がある。ちょっと風変わりな名前だが、これには二つの説がある。

寛永三（一六二六）年十月、二代將軍徳川秀忠の正室であるお江戸（崇徳院）が逝去し、その葬礼が芝増上寺で行われた。茶毘（火葬）に付されたのは、今の六本木駅近くにある深広寺の旧地だったが、葬列の途中の道筋にあたる、坂下のこの谷地に仮御堂が置かれた。この仮御堂のことを竈前堂と称し、後に、この一帯が竈前堂谷と呼ばれるようになり、やがて我善坊谷に転訛したという。もう一つの説は、この谷地で座禅を組むお坊さんがいたので座禅坊谷という地名が起り、これがなまっ

て我善坊谷に変わったともいう。我善坊谷坂は中腹から北西に屈曲し、崖地に沿って虎ノ門五丁目、さらに六本木一丁目に向かって駆け上る。樹林が坂に覆いかぶさり、石塀にツタがからまり、江戸の風格をかもし出している。坂の周囲には、御手先組と呼ばれる下級武士の組屋敷と、但馬出石藩



我善坊谷坂の坂下から続く三年坂

仙石家・陸奥八戸藩南部家の上屋敷があった。江戸切絵図には坂のマークの「三」が付されていて、今と同じカーブを見せている。坂下を直進すると、霊友会釈迦殿の裏側を直角に曲がって上る石段坂がある。この坂を三年坂（三念坂）という。「この坂で転ぶと三年以内に死ぬ」という迷信からきている。寺院や墓地のそばの坂によくつけられる坂名だが、元禄時代に、坂上に長音寺という寺があった。

薬研坂 一服茶屋

六本木五丁目十三と十四の間に「於多福坂」という名坂がある。坂の傾斜が中ほどでいったん緩やかになり、再び急激に下っていく。この形状が、顔の真ん中が低いお多福の面に似ているのでこう呼ばれる。

赤坂四丁目十五と七丁目二の間の坂を「薬研坂」という。中央がくぼみ、両端が高くなっている。この形が、薬種を砕く器具の薬研に似ているから。このように、形から連想した坂名もある。